玉木圭一　26 歳の学生新人賞　　紹介者：西川（浪速包丁恋月夜）

玉木圭一ら北陸の若手オリエンティアで構成するオリエンテーリングチーム「浪速包丁恋月夜」はフットO をはじめ、スキーO でも各地のイベントに出場し優れた成績を残している。
写真を撮影したのは、インカレショートの翌週に行われた全日本リレー大会の会場。玉木はこの日も福井県代表として選手権クラスを走っている。

2000 年滋賀インカレショートの新人特別表彰を飾ったのは、1975 年 3 月 28 日生まれ、オリエン年齢 26 歳の玉木圭一であった。ここで言う"新人"とは、日本学連登録初年度にあたる主に大学一年生が対象であるが、26 歳の彼がどうしてこの賞を受賞したのか、私なりに彼の経緯を書いてみたい。

オリエンテーリングとの出会い

私と彼が最初に出会ったのは、10 年前のことである。きっかけは高校時代の山岳部の先輩後輩ということである。が、出会った時はとにかく強烈な印象を与えられ、私の性格も彼によって 180 度変えられたと言っても過言ではない。それくらい強烈だった。その後も先輩・後輩の枠を越え、今でも親友として親しく付き合っている。

私は富山大学在籍中にオリエンテーリングを始めた。そして夢中になって競技に取り組んだ。故郷に戻り、友人と会うたびに、私はオリエンテーリングのすばらしさを語り、そしてみんなに勧めた。おかげで、金沢大学から数人の同郷オリエンティアが生まれた。その頃の彼は専門学校生で、競技そのものとは離れつつあった。しかし、私は彼には特に強くオリエンテーリングを勧めた。

そんな話を繰り返していく度に、彼はオリエンテーリングに惹かれつつあったようだ。専門学校を卒業し、社会人になってから、ようやくオリエンテーリングをやりたいと、コンパスを購入した。いきなり大会にでるのもまずいだろうと言うことで、福井・石川のテレインに一緒に入り、地図の見方、コンパスの使い方、地形のイメージの仕方等、マンツーマンでオリエンテーリングの基礎を教えた。彼は確実に技術を身に付けていった。

初の大会となったのは、岐阜県岩村での東日本大会の「東濃牧場」である。彼は B クラスに出場し、2 位くらいの成績だったのを覚えている。デビュー戦でのこの成績に私の周囲の人間は驚いた。

この頃から、彼の生活は変わった。毎週オリエンテーリングの大会に行くことが、週末の過ごし方となった。スキー0 も始めるようになり、今では、エリートクラス出場も果たす実力を持っている。

「インカレに出たい。」

そんな彼ではあるが、ある日ふと口に出した。「インカレに出たい。」この文章を読んでいるほとんどの人はインカレ出場を経験しているか、またはそのすばらしさを理解していることと思う。彼は、出られないまでも私が出場した常磐インカレも来てくれて、観戦してもらった。そしてインカレを見る度に、どんどん出たいと言う欲求が沸いてきた。しかし、一度社会人になってから普通の大学に入学するのは、大変難しいことである。

そこからインカレ出場への模索が始まった。夜間の大学に通うのはどうか？しかし、彼が在住している福井には夜間の大学がない為に到底無理である。他には･･･、放送大学。これが思いついた瞬間、彼は動き出した。日本学連にインカレ出場の際の年齢制限や放送大学の扱い等を問い合わせ、そして今、彼は彼の夢であるインカレ出場に向けて走り出している。ショートの表彰が終わった後、彼は私に言った。「表彰の舞台に立つことのすばらしさを味わった。また舞台に立ちたい。今度は新人特別表彰ではなくて。」

彼の長所は、アイデアが豊富なこと、また思い立ったら止まらない行動力である。これが、非凡なオリエンティアを作ってしまった要因となっていることと思う。

全国の大学一年生オリエンティアへ、私は伝えたい。一人の人間がここまで動くほどインカレの舞台というのはすばらしい。逆にこれほどすばらしい舞台は他にはない。またインカレと言う貴重な舞台に立てるのは大学時代だけである。だから一つ一つのインカレをこれから大切にして望んでほしい。

夢をかなえようとするオリエンティアの活躍に私は大いに期待している。